

私が初めて外国人と何年ものやり取りをしたのは、カンボジアの少女だった。この体験は私に大切なことを教えてくれた。人と人がつながりあう喜び、相手を理解することの重要性。そして、自分に出来ることを実践する勇気。そのどれもが、私にとってもう一度見つめ直すべき事柄だと思った。

中学一年生の春、あるCMを見た。裸足で街を歩き、朝から晩まで働く少年。家が貧しいがために、学校にも行けない。私にとってその映像は、あまりに残酷で、何度も見た光景だった。いつもならば「私には関係のないことだ。」と見て見ぬふりをしていたが、その時の私は「助けたい。」そう強く思った。

私が見たCMは、「チャイルド・スポンサー・シップ」という活動のものだった。私はこの活動に参加することを決意し、それから約二年間カンボジアの少女を支援した。

初めて見た彼女は、明るい笑顔をした可愛い少女だった。「これからこの子を支援するのだな。」と実感を持つとともに、遠い国に住む人と、今私は確実に交流をしていることが不思議でたまらなかった。それからの二年間の支援はあっという間で、手紙のやり取りをすると、彼女が好きなもの、食べ物、場所、そして何を思っているのかが知れて嬉しくなった。動画が送られた時には、楽しく遊んでいる姿を見れて、心が温かくなった。報告書を見た時、彼女と、彼女の住んでいる地域の子どもたちの環境がよりよくなったことを知れて、「やってよかった。」と実感することができた。そして、彼女が実際に書いた手紙に触れるとき、世界の人とつながりあえることの喜びを感じた。

私は最初、支援することは金銭的なこととしか考えていなかった。そして私が彼女にできることは、それだけしかないと思っていた。しかし、「チャイルド・スポンサー・シップ」という活動を通して、その考えは間違っていたことに気づかされた。支援するということは、どれだけ相手の心に寄り添って、相手を理解しようとするか、この態度が必要なのだと感じた。そうすることで、相手も、そして自分も良い気持ちになれるのだと思う。そしてこれは、支援することだけに限らず、日常生活でも同じではないだろうか。友達が悩んだり、困ったりしている時、相手の心に寄り添わなければ、きっと何も解決しないだろう。自分とは異なる意見を持つ人と交流する時、相手を理解しようとしなければ、お互いが嫌悪感を抱くだろう。「こんなことは当たり前だ。」と思うかもしれない。しかしこの当たり前が出来ているなら、人間関係の問題、例えばいじめや差別は起こらないと思う。頭では理解していても、行動として出来ていないことは多いと私は思う。

それこそ、カンボジアの少女との体験が教えてくれた、人と人がつながり合う喜びや自分に出来ることを実践する勇気だ。家族や友達、自分のことを支えてくれる人達の存在を当たり前のように感じ、感謝できていなかったり、積極的に自分から行動することができなかつたりすることがある。だから私は、少しでも行動に移せるようにしていきたい。そうして、もっと自分の視野を広げていきたいと思う。

「チャイルド・スポンサー・シップ」での体験から気づいたこと、教えてもらったことは、人として大切なことだと分かっていたが、行動として出来ていないことばかりだった。何不自由ない生活を送っているからこそ、忘れてしまうのかもしれない。だけど忘れてしまったら、世界とつながる自分とはとてもちっぽけな存在なのだろう。